

モイモイのモイ

(一歩一歩のたった一歩)



クライミングの資質が早くから光った孤児のトゥリー(仮名)、当時11歳。ある日、彼女は姿を消すが、その悲しい経緯はいずれ紹介する。



2011年1月30日に開催された第一回のクライミングワークショップで祝辞を述べるシェムリアップ州教育青年スポーツ局長であり、また、カンボジア・クライミング連盟の理事長に就任したウン・スレイディー氏。前列には、シェムリアップ市長(右)、カンボジアオリンピック委員会事務局長がいる。

カンボジアの子供たちと クライミングをする(一)

カンボジア・クライミング連盟の設立が正式に承認された2011年1月、遂に僕らはワークショップの開催を実現した。

シェムリアップ州教育青年スポーツ局長をはじめ、そうそうたる重鎮が列席した。そのワークショップは、僕らにとつて緩やかな転回点であり、ある種の節点だった。その日を境に、僕は子供たちとのクライミングを

はつきりと中心テーマに据えた。それは自然の成り行きだった。その下地となる孤児院の子供たち(仮にC孤児院と呼ぶ)との交流について暫く書いてみたい。

で、話は再び、2009年に戻る。まだ人工壁の欠片も僕の脳裏にない2月、身近な縁で、たまたまC孤児院の孤児5人と、クレーン山・チエ岩ヘクライミングに出掛けた。僅か1日だったけれど、子供たちは、冒險の持つリスクとそれを切り抜

けるスリルと充実感、自分で考え、自分で問題を解決する手ごたえに夢中になった。クライミングの真髄に触れた者特有の現象が、幼くして惨い生を受けた子供たちにも起こったのだ。

そして3月末、帰国すると、人工壁の話が舞い込んだのだが、そのことはすでに書いた。その頃、僕は孤児院の子供たちとの経験をまだきちんと消化できていなかったが、何かが僕の体の隅に火を点していた。そんな折、視覚障害の子供たちを対象にしたクライミング教室の指導を手伝う機会が巡ってきた。ある小学生が僕をニツクネームで呼んで、僕らはすぐに打ち解けた。

驚くほど素直に肯き、それを解決してみせた。彼のお陰で僕は不完全な自分をすんなり自覚できたし、教える側が、じつは教えられているといったある種の真理を体験したのだ。

雨季に入った5月から、僕は月に2回の割合でC孤児院の子供たちと、シソポンの岩場でクライミングをした。ある日、教育関係の支援を行っている米国のNGO・Peppy Rideの女性リーダーがゲスト参加した。彼女は30人ほどの小中学生にスクーリングをやるのかと僕に質問した。まず、すべての保護者の同意が要ると、僕。結局、この話は実現しなかった。未成年者の親の同意は後に、僕らの前に立ちはだかる大きな壁のひとつとなる。今日、多くのクライマーは「オウンリスク」(*)への合意を当たり前の共通認識と感じているだろう。しかし、カンボジアでは事情が違う。僕は

目指せ、 アンコールクライマー誕生!!

スタンスが決められない彼に、僕は不用意にも、ちゃんと足元を見るんだと言ってしまった。ボク、目が見えないんですけどう。だから心の目で見ると、と苦し紛れの僕。うん、そうか、と、彼は

(続く)

*オウンリスク: Take your own risk (自己責任) の和製俗語; クライミング講習やイベントへの参加、または施設の利用に際して、事前に、自己責任であることに署名した文書、日本では「誓約書」または「念書」、英語圏では「Waiver (権利放棄書=免責規定)」の提出を、イベント開催母体や施設管理者が要求するのが通例だ。